Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

短期大学における作文教育の試み

著者	金子 泰子
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 4: 1-10(1985)
発行年月日	1985-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022370

(C) 1985 the Author.

短期大学に於ける作文教育の試み

金子泰子

はじめに

短大で作文指導を始めて四年になる。幼児教育科一年生を対象とした、一般教育の中の「国語」という科目に於てである。「自由にやって下さって結構です」という大学側の言葉に甘えて、私は、かねがねやってみたいと思っていた作文指導を始めることにした。文章表現を特に勉強したことはない。それどころか、書くことに対するコンプレックスは人一倍強かった。だからこそ、作文指導をやってみたかったとも言えるだろうか。

教員養成大学を卒業し、その上修士課程をも修了。中学と高校の国語の教師の免状を持ちながら、こんなことでいいのだろうか。どうにかしなければ、どうにかしなければと思いながら過ごしてきた。この機会に、教えるという立場を利用して、学生の作文を教材に、自分も一緒に勉強してみたいと願った。

非常勤講師としての週一回四十五分の授業時間、初年度（昭和五十六年度）の学生数は二クラス計二百人に及んだ。時間の短かさと学生数の多さに悩みもしたが、授業時間の短かさは準備にかける時間で補えるし、学生数の多さ、すなわち提出作品の多さは、豊富な資料につながることに気付いてからは、それ程、苦にはならなくなった。未熟な教師が勉強するのに、これ以上の好条件はなかったかもしれない。

こうして始めた授業も早四年。とにかく書く、書く、書くで学生を追い立て続けた。未熟な指導で学生も随分当惑したことと思うが、予想以上の作品の出来に喜んだこともしばしばである。学生の作品は丹念に読み、抜き出した問題点をもとに指導案を立てた。現実生活に密着し、生き生きとした学生たちの作文は実に興味深く、添削作業もそれ程苦痛ではない。授業中に使う例文も、特に必要な時以外は、学生の作品の中から選んだ。それがかえって、学生の注意を呼ぶことにつながったようだ。こんな訳で、授業内容は、系統性がなく、成り行きまかせになりがちであったが、それでも、年を重ねるに従い、資料も増え、学生の能力に見合った指導過程のようなものが浮かんできたように思われる。

四年間の実践の中から得たものは数え切れないが、以下、学生の作品を交えながら、いくつかの活動と指導の実際を報告したい。

一　書く楽しさを知る

「作文」と言うだけで「エェーッ」と声が上がる。原稿用紙を前にすると、金縛りにでもなったように、筆が進まなくなると訴える学生がいる。なる程、書くことは、しゃべること程気楽にはいかない。しかし、苦痛の大きい分だけ喜びも大きいはずである。課題に工夫を凝らし、何とか、書く楽しさを味わわせたいと思う。

1　気楽に書く

「何でも、自由に書きなさい」と言われる程困ることはない。「何を書こうか、何を書けばいいんだろう」とあれこれ思い悩む間に時間が過ぎてしまう。

初期の課題は、日頃から興味があり、情報量の豊かなものを題材に取り上げた。又、途中で書きよどむことのないように、具体的で細かいてびきを与えるように配慮した。

課題①「私の好きなテレビ番組」

好きなテレビ番組名を好きな順に三つ並べそれぞれ好きな理由を書く。

〈てびき〉いろいろな角度から好きな理由を考え、読み手が納得するように書く。

・理由例――番組の種類・他の同類番組との比較・登場人物（及びその性格）・放映時間・独自の楽しみ方など

上手に書こうとせず、とにかく気軽に、どんどん書いてみる。

〔学生作品例〕

歴史への招待　父が歴史、考古学等に興味を持っていたところから、家族全員で欠かさず見るようになった。ブラウン管をながめながら、傍らでは父が、その日のテーマについて、自分が本で読んだ内容や、自分の目で確かめたことなどを話してくれる。まるで青年にでも戻ったような父の目を見るのは、私たちにとってもうれしいことだし、何よりも、家族が一つのテーブルで、同じ話に熱中できるのがすばらしい。私としても、日本の歩んできた道や、時間の中での小さな人間の力を知ることは大きい。

赤毛のアン　アニメの中でも、自然の美しい草花がとてもすてきに書かれているところが一番好きだった。アンの負けずぎらいな所も私の性格とよく似ている。アンの想像好きなのも楽しく見れるところだったと思う。

料理天国　一週間の最後の土曜日、ちょうどおいしいものでも食べたい気分の時間、この番組を見て少しでも味わった気分になれる事が最高。だが現実にもどることがまた恐ろしくなってしまう。

2　自分に忠実に書く

「気楽にどんどん」と言われても、そうすんなりと書けないのが実情。筆を進める第二の手立てに考えたのが、「自分に忠実に」ということである。借りものの言葉ではなく、深く自分を見つめたと

ころから出る言葉こそが一番書き易いことを分らせるために、現実生活の一断面を切り取って課題とした。入学して二か月、学校の様子もほぼ分り、自分をみつめる余裕のでる頃である。

課題②「入学してから、二か月が過ぎました。」

この一文を書き出し文として書き続ける。

〔学生作品例〕

入学してから、二か月が過ぎました。あの日、夢と希望に胸ふくらませて上田女子短期大学の門を入った私でした。あこがれの大学生活でした。が、しかし現実は全く予想外でした。狭い庭、びっしり詰まった授業内容、学海とはいえども田んぼの中。やっぱり親の反対を押し切ってでも、あこがれの東京へ行けばよかったと後悔していました。そんなある日、父から一通の手紙が届きました。一生けん命勉強しなさいと、書いてありました。生まれて初めて父からもらった手紙なのです。別に大したことが書いてあるわけではないのに、私にとっては他のどんなものよりも励ましになりました。その日から周りのものが違って見えるようになりました。川も田んぼも林も、私が育った所とよく似ています。夕方かえるも鳴きます。景色を見渡すたびに、両親の働く姿が浮かびます。「よし、二年間一生けん命やるぞ。」と、思う今日この頃です。この二か月で、私はずいぶん成長しました。

3　書くことを生活の中に定着させる

書く力は一朝一夕につけることはできない。何といっても日々の種み重ねが肝心。学校行事などで授業が続かない時は、学生が書くことから離れてしまわないようにとの願いを込めて日記文を課題にした。

課題③「休み中の五日間（連続でなくてもよい）の日記をそれぞれ三行ずつ書く」

〔学生作品例〕

五月一日（土）曇り

東京から、仲間たちが帰って来た。少しやせて。ぐちでも何でも聞いてやろう。一番恵まれているはずの私だから。

五月二日（日）曇り

戸隠へ。市内のむし暑さが信じられないほど涼しい。どの山も競って春を匂わせている。長野を愛しく思える瞬間。

五月三日（月）晴れ

夜の匂いが好きだ。特に雨上がりがいい。言葉では表現できない。からだが感じる好感。どんな一日でも、すばらしく変えてしまう。

五月四日（火）晴れ

家事をしながら、いつか持つはずの自分の家庭の姿を思ってみる。少しこそばゆい、が次々と思い浮かぶ理想像は果てがない。

五月五日（水）晴れ

野球大会で後輩や恩師たちに会う。もう高校生ではないことを痛感した。自分が望む望まないにかかわらず、確かに成長している。

長く書く必要はない。何十行にも及ぶ日記を一日だけ書くよりも、たとえ一行でも二行でも、何日間かに渡る記録には、大きな魅力がある。一日では読みとれなくとも、何日かに渡れば、書き手に必ず何らかの変化があり確かな成長の跡がある。

以上、第一段階として「書く楽しさ」を目標にかかげ、三つの方策を紹介した。

この段階で、最も配慮したことは、学生の作品をクラス内で紹介する機会を、なるべく多く作ることである。書くことは、しゃべることとは違い、かなりの努力と忍耐を伴うものである。だからこそ、認められ、賞められた時の喜びは大きい。提出された作品は丁寧に読み、優れていると思われる部分を具体的に賞めるように心がけた。クラスで発表できなくとも、赤ペンで、積極的に評価を与えるようにした。例年、これがきっかけで、驚く程の上達を示す学生が何人か出る。小さな自信が大きな進歩につながる。ただがむしゃらに書く段階から少しずつ抜け出して行く。

二　書き慣れる

書く回数を重ね、とにかく書き慣れることが第二段階での目標である。

授業時間内の短時間に行う練習課題に、短作文を活用したが、とりわけ、字数制限――二百字――作文（注1）をよく利用した。

1　題材をつかむ目を持つ

言われるままに書き綴り、とにかく何でも書いて原稿用紙をうめる状態から、何を書くべきかを考え始める時期に入る。生活の中で、取り上げるべき題材はどこにでもある。要は、それをとらえる目があるかどうかである。

表現の技法についても、てびきの中で、適宜指導を加えていく。

課題①「心に強く残る出来事」

＜てびき＞思わずドキッとしたこと、心底いやだと思ったこと、最近特になつかしく思い出すことなどを二百字作文に書く。

主観的感情表現（うれしい、悲しい、つらいなど）を避け、客観的な事実の描写を心がける。

〔学生作品例〕

よけいなお世話

ある園芸店でアルバイトをしたときのことだ。私が店番をしていたとき、ちょっと品の良さそうな奥さんが花を買いにやってきた。荷物をたくさんもってその上、買いたい花を入れる箱をもって一生懸命花を選んでいた。私はその箱をもとうと思い「おもちします。」と言って箱を引っぱった。そのとき彼女はぐいっと力まかせに私が引いた逆方向へ箱を引いた。そのとたん私はヒャッとした。小さな親切大きなお世話とはこういうことなのか。

夕やけこやけ

あれはいくつの時だったろうか。たぶん私が、まだ幼稚園に通い始めたばかりの頃だと思う。三輪車の後ろを兄に押してもらって、

家の前の道を東へ東へ行ったことがある。時間を忘れてしまっていた二人は、いつの間にか日が暮れているのに気づいた。心細くて泣き出してしまった私に、「泣くな」と言った兄。兄以外に頼る人はいなかった。西の空はまっ赤に燃えていた。そんなことがあったからだろうか、私は今でもこの歌が大好きだ。

2　ことばを選び、わかり易い文を書く

きめられた字数（二百字）の中で(注1)、無駄なことばを省き、簡潔な文章を綴る訓練を続ける。

使用語彙を広げる意図も込めて、課題を工夫し変化をつける。授業時間内に何度かくり返す二百字作文の新鮮さを保つためにも必要な配慮である。

課題②例「私の大好物」「最寄の駅から自宅までの道順説明――土地勘の全くない人を対象に――（略図をつけて）」「左手の描写」等。

〔学生作品例略〕

3　自分の文体を知る

回覧文集で友人の作品を読んだり、授業中に紹介される文章を聞いたりするうちに、おぼろげながら、自分の文のスタイル（特徴）に気が付きはじめる。描写文の得意な者、説明的になり勝ちな者、散文詩のように作文を楽しむ者など、提出される作品も変化に富み、添削が楽しみな時期である。

二百字作文は、回を重ねるにつれ上達するのがよく分る。長文指導との兼ね合いにも配慮が必要だと思うが、導入時での、作文技能の練習方法としては、予想以上の効果を示すものであると思う。

〔学生作品例〕

回想

にこにこしながら、弟が帰ってくる。もうすぐ修学旅行なのだ。そんな弟を見ていると私までうきうきする。覚えはある。何年前だろう。中学生だ。はしゃぎながらやった下調べ、グループ作りに係会。旅行なんて、あっという間。五日間もあったのにやたらと短く感じた。あーあ。あの頃の友達、今頃何をしているかなあ。なつかしい。弟にも、いい思い出をたくさん作ってきてほしいな。そうだおみやげは、しっかりたのんでおかなきゃ。

小刻みな震え

奥座敷にピアノが置かれた。新品の障紙と畳の香の中。黒光りに顔が映る。楽譜も出さずがむしゃらに弾き出す。はねる。はねる。気がついたら夕立ちだった。今度は楽譜をのせる。ワルツだ。雨の音が強くなる。けんばんが汗で濡れる。今、この大きな家でひとり。電気もつけず、音と遊ぶ。新築したばかりの家には、人間臭さがない。ピアノの音と雨の音の中で家が歌い出すようだ。小刻みな震え。気がつくと、いつの間にか雨がやんでいた。

抗議文

私は断然抗議したい！　やい、ＳＢＣ！　「太陽にほえろ」を、日曜日の午後十時半なんかに移したのは、一体誰だ！　私はあの番

組が大好きで、金曜日といったら、即、「太陽にほえろ」に結びつく位だったんだ。週末を楽しみに、のんびりと見るはずの番組だったのに……。日曜日の、それも十時半だなんて、最低じゃないか。しかたなく番組の時間帯を移す時は、見る側の気持ちや事情を最優先して、一番適した時間帯を選んでほしい。

三　文章を綴る

いよいよ第三段階、本格的な意見文や議論文に進みたいと思うが、現実にはなかなかそうはいかない。通年とはいえ、週一回四十五分の授業では、第二段階（書き慣れる）までが精一杯。ようやく長文の構想指導をと思う頃には、例年、年も明け、授業時間も残り数時間というのが実情である。

1　型を利用する。

短期間での長文作成のために利用したのが、文章構成の基本的な型である。構成の型（序論・本論・結論、起・承・転・結など）を、あらかじめ示し、特定の型の中で、自由に表現するというものである。

手紙の書式も、その典型と言える。

課題①「恩師に近況報告文を書く――書式にのっとって――」

〔学生作品例略〕

封筒の表、裏書きも含めて、目上の人に出す手紙文の練習をする。目上の人（恩師）と特定するのは、学生が最も苦手とする、いわゆる敬語表現を練習させるためでもある。

手紙の書き方は、例年、学生からの要望が予想以上に強いこともあり、不可欠の課題の一つとなっている。毎年、書式に関する授業を行う毎に、先人の築き上げてきた型（知恵の集積）のすばらしさを再認識する。

課題②「私のすすめる……屋さん」

例文を参考に、行き付けのお店屋さんを友人に推薦する文章を書く。

〈てびき〉体験や実感及び他との比較など、具体的にいい所を述べ、読み手の行動を誘うように書く。　――例文配布――

〔例文〕

私のすすめるお寿司屋さん

お寿司のおいしさはなんといってもしゃりの上に載っているおさかなによって決まります。そのおさかなが、うなってしまうほどおいしく、しかもしゃりと同じほどぶ厚い、それに値段が安いと聞けば一度食べてみたいと思いませんか。　（以上序論部　以下略）

例文をお手本に、推薦文を書かせる。例文があると、日頃、筆が遅く、なかなか書けない学生も、まとまった作品を仕上げられる。どうしても、書き出せない者には、例文の書き出しをそのまま模倣させる。「ケーキ屋さん」ならば、例文を真似て、

「ケーキのおいしさはなんといってもスポンジのきめの細かさに

よって決まります。その……」という具合である。

書き出しがスムーズに運べば、後は不思議にどんどん書ける。途中でつまれば又、例文を真似ればよい。書きたい事柄さえ盛り込めば、この作品の目的は達成できる。普段、ペンをおいて悩むことの多い学生が、わき目もふらずにスラスラと書き進む姿を見るのはうれしいものである。

〔学生作品例〕

私のすすめるクリーニング屋さん

一張羅の洋服。大切にしまっておこうと、クリーニングに出す。ところが、覚えのないしみがつき、縮んで返ってきた。なんて経験ありませんか。お店に文句を言ってみたところで後の祭。泣くしか術はありません。そんな苦い思い出をお持ちのあなたに、ぜひお勧めします。早い上に、ひとつのしみも見逃すことなく、大切な洋服をあなたの手元に返してくれるクリーニング屋さんがあるのです。

こぢんまりした明るい店内。隅から隅まで品物でぎっしり。いかにも気の良さそうな中年のおばさんが迎えてくれます。「ここにしみをつけてしまったんですけど」「あらあら何のしみ?」「それがよくわからないんです」「ふんふん、やってみましょう」そんな会話の後、しみのついた洋服は印をつけられて、職人さんの手に渡ります。入念にしみ抜きを施している職人さんは、無口で、いかにも働き者。アイロンをかけているもう一人のおばさんは、ズボンの裏や裾まで気を遣ってくれています。そんな人たちだから、安心して洋服を委ねて帰れるのです。

次の日行ってみると、「ハイハイ、できてますよ」「まあ、きれいになっちゃって」「これを着てデートかしら」「やだー、うふふ」受付けのおばさんの気さくさと仕事の良さに惚れこんで、遠く湯田中温泉の旅館やスキー場のご主人まで通ってくるとか。またウェディングドレスや高価なきもの、羽毛のジャンパー、皮製品まで取り扱っています。羽毛のジャンパーなどは、買った時よりもフカフカになって返ってきますよ。(値段、道順、定休日など二百字分中略)

上田のみなさんには少し縁遠い話かもしれませんが、とっておきの洋服のために、交通費を奮発してみませんか。ちなみに、私はそこの娘。満足していただけること受け合いです。松屋クリーニングをよろしくお願いします。

2　書きだしと書きおさめ

文章の書きだし、あるいは書きおさめの難しさは、誰もが認めるところであろう。この二つの問題が解決するだけで、どれ程文章を書くことが楽になるかしれない。

はがき文のむすびの書き方として、大村はま先生の「暑中見舞てびき」(注2)の中に次のような項目があり、授業中に紹介したことがある。

◇　むすびになんと　書いたらいいか、というとき、つまり、なん

かはんぱでこまるときは、その書き終わって、「あと、一言」ということになったとき、目にうつっているもの、耳に聞こえているものを、とらえてひと言書けばいいのです。

○朝からの雨がまだ降っています。

○読みかけの本がひろげたままです。

○弟がなにやら大きな声を出しています。

○るす番もいやになりました。まだ、だれも帰ってきません。

というぐあいに。

この年の夏休み、学生から私に届いた暑中はがきには、たのしい書きおさめ文がいくつか目についた。

3　構想を立てる

構想指導は、力不足で、失敗ばかりくり返している。あまりうまくはいかなかったが、構想指導をした際の学生の作品があるので紹介する。

課題③「母を語る」アウトラインを作り、千字前後の作品として仕上げる。

〔学生作品例〕

アウトライン

作品の題「母は車でフル回転」

主題　「母の運転」

主題文「母は生活の中に車をうまく取り入れ、私たちにはなくてはならないものになった」

書き出し

Ⅰ　母が免許を取る時のエピソード

1　自動車学校へ通い始めた頃

2　仮免の頃

3　免許を手にした時のこと

Ⅱ　免許を取ってからのこと

1　軽トラックを買った父

2　雨の日の迎え

3　心強く思う父

4　母の様子

Ⅲ　まとめ

1　私が願うこと

2　しめくくり

母は車でフル回転

「子供の手が離れたことだし車の免許でも取るかな。」

突然言い出したと思ったら早速申し込んだ。あれからそろそろ三年経つのだ。

自動車学校に通い始めると夕食の時など知り合った友達の事や車の話しを盛んにする。笑顔で話す母は学生時代にもどった様だった。

仮免の技能試験の時は食事中でもコースの図とにらめっこしていた。その甲斐あってか一回で合格した。その頃「仮免ストレート」

は母の口癖となった。
結局、同期生の中で一番早く免許が取れたのだった。母は昔から機敏だったこともあって「学生並み」と言われた事をとても喜んでいた。また、お金がかかる時期の子供をもつ母は考えていたのだろう。
「少しでも早く取れたから、それだけかかったお金が少なかったよ。」
と、嬉しそうだった。そんな母を私は見直した。その日は家族四人で盛大にお祝いをした。
私達の家族に新風が吹き込んだ。父は母に高級車ならぬ軽トラックを買った。少し田畑があるので大変役に立つのだ。
ある日学校にいた私は雨が降って帰るのに困り電話をした。しばらくして門に母が運転する軽トラが止まった時、私はクラウンよりすばらしい車に見えた。
「とき子が免許あるから安心して飲めるな。」と父は言う。親戚に行ったりした時、自分が車を運転して帰らなければならないと思うと、お酒を十分に飲めなかったのだ。また、母とショッピングに出かける事が多くなったのも変化の一つである。
「免許がなかった頃が信じられない。」
と母は言う。確かに我家になくてはならないものになっているし、母自身も行動範囲が広がって生き生きしている。
そんな母を見て現在私が願うことは、なんといっても事故を起こさないように、ということである。私も最近免許を取り運転すると常に危険がつきまとっていると身をもって感じるからだ。しかし危いから沢山乗らないでほしいと思ってもつい休日に故郷の駅に着くとむかえに来てもらってしまう。娘を隣りに乗せて家路を走る母を見ながら私は、
「お母さん、まだまだ若いね。」
と、つぶやく。
結婚して苦労してきた母は今が一番キラキラしている。まさに母は車でフル回転！

アウトライン作りに入るに先立って、「母」と題した二百字作文を五枚書いた。五枚すべてを作品の材料として使用する訳ではなく、前もって題材（母）を色々の側面からとらえておき、主題決定の際の一助となればと考えたためである。
この指導で、学生の作文は、一応のまとまりを見せた。が、あらかじめ集めた材料をもとに構想を練り、このようにして作り上げた作品は、まとまりはあるものの、どこかスケールが小さく、おもしろみに欠けるように感じる。書きなれないうちは、むしろ、ある特定の型に、好きな材料を放り込んで作品を作り上げる方がダイナミックに展開するように思う。課題②の場合も、例文にとらわれすぎてうまく行かないのではという心配は取り越し苦労に終わり、例文を超える作品がいくつも出来上がった。

この辺のことは、資料と勉強不足で、憶測の域を出ないが、今後の指導の課題として考えて行きたいと思う。

おわりに

誠に未熟で、作文指導を研究される方々の目にふれるのが恥ずかしい報告であるが、これが、白紙の状態から作文指導を始めた新米教師の一到達点である。問題点を指摘し、あれこれお教え頂ければと思う。

実力不足で、学生には申し訳ない気がしているが、私は、この上ない貴重な経験をさせてもらった。非常勤講師としての週一回四十五分だけの授業ながら、提出される作文のおかげで、常に学生たちと話しているような楽しい四年間を過ごした。読む作文のない週は、どことなく手持ち無沙汰で、寂しい思いをする。続ける程に勉強すべき事柄が山のようにあって、難しいことこの上ないが、それでもやはり、書くことの魅力は大きい。

長文の指導など、残された課題を追って、今後も、学生と一緒に、作文にかかわって行きたいと願っている。

（一九八五年一月三十一日）

注1　字数制限作文　これは一種の言葉遊びである。けれども、作文技能の学習に、予想外の効果をもっているものでもある。

字数―二百字―を制限して書かせる作文である。二百字以下ならどんな字数でもいい、というのではない。句読点、会話符号を入れて二百字ちょっきりの作文を書かせるのである。一字多くても、一字少なくてもだめである。二百字の原稿用紙であれば、第一行目の第一字から書き始め、最後の行の最後のマス目に句点の「。」がくるように書かせる。二百字ちょっきりの文章に仕上げるために、書き手は、何回も文章を読み返し、推敲を重ねなければならない。その推敲の結果、短文の積み重ね、接続詞を使わない文連接、文末表現の変化など、現代的な文章を書くときの基本技能を学習していることになっている。

二百字ちょっきりと制限したために、遊びながら、以上の結果を、無意識のうちに、えることができる。短作文として楽しく、どの二百字作文も、例外なく、ほめることができるのも、作文導入の短作文として適していることを示すものである。

（「作文指導事典」59ページより）

注2「大村はま国語教室」第5巻　筑摩書房265ページ

参考文献

○大村はま「大村はま国語教室5」筑摩書房
○大村はま「大村はま国語教室6」筑摩書房
○樺島忠夫　中西一弘「作文指導事典」東京堂出版
○樺島忠夫「文章作法事典」東京堂出版
○藤原与一「ことばの生活のために」講談社現代新書
○藤原与一「作文の基礎演習」中央図書出版社